

発行所 日本キリスト教団 なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203/205
Tel. (045) 671-1109
振替 00200 - 1 - 47369 E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp
http://w01.tp1.jp/~ja6694550
発行者 堀江有里 (題字 松橋 順)

宣教方針

- ① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
- ② 地域の問題に関わる。
- ③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会 主日礼拝 日曜日 午前10時30分より

なか伝道所の昼食を考える

なか伝道所では日曜日の礼拝後、昼食を提供している。トーストとおかず、飲み物で、代金は一人二〇〇円。有志の教会員が交替で当番を担い、二〇名相当のおかずを準備する。奉仕できる仲間が少なくなってきたこと、当番は負担などの声を受けて、話し合いの結果「パンの日」という新しい試みを始めてまもなく一年となる。

なか伝道所の最初の昼食は、アンパンだった、いや、カレーライスだった？ 諸説あるが、初期のメンバーが最初の礼拝を守ったその日から、礼拝後にはお昼をみんなと一緒に食べる習慣を続けてきたなか伝道所。ある主日の午後十九名の仲間が集まり、「なか伝の昼食を考える」話し合いを行った。はじめになか伝の昼食の位置づけについて確認をし、必要性について、また負担について率直に意見を交わした。負担軽減の取り組みとして始めた「パンの日」の感想、その他についても、多くの意見を得た。

1. なか伝の昼食の位置づけ

教会の運営維持のためには、多くの奉仕が存在する。なか伝は集会は週一日だが、その日曜日はとても忙しい。午前中に礼拝を守り、昼食を食べて片付けるといっては十三時過ぎ。掃除をし、午後は委員会や読書会、学習会などの予定が詰まっている。

片道2時間以上かけて通う仲間もいて、飲まず食わずではお腹がすいてしまう。各自でお弁当を持参する方法もあるが、人によっては負担が大きく、経済的な事情などから外食や弁当を買うのが難しい仲間もいる。礼拝後にリーズナブルな予算で仲間と一緒に囲む昼食が食べられるのを楽しみに足を運ぶ仲間もいて、なか伝では、昼食サービスは必要性が高いと一致した。

一方、昼食を提供するためには、食事の準備、パンや調味料等の備品を買い置きする目配り、お皿や箸を準備し後片付けする台所仕事、飲み物を準備し配膳する奉仕、集めたお金を管理して記帳する食事会計など、雑多な奉仕が発生する。その中でも食事当番は、材料をスーパー等で購入し、主に自宅で調理を行い、タッパーなどに詰めて電車やバスを乗り継いで伝道所まで持参する。体力的にも時間的にも負担が大きい。

なか伝の昼食は「必要性が高く、負担が大きい」ということを確認した。

2. なか伝の昼食の現状

食材の購入、調理、運搬といった食事当番の負担が大きいという意見を受けて、2名体制で食事当番をする試みや、月に一度「パンの日」を設ける試みを始めた。

「パンの日」には、某コンビニエンスストアの惣菜パンを購入して提供する。現在、毎月第二週に設定しており、この日は食事当番の奉仕が不要となる。某社の惣菜パンは種類が豊富で新商品も多く、温めなくても食べやすいことから採用を決めた。近隣で仕事をすする奉仕者が事前に注文し、当日の朝にコンビニへ取りに行く。お皿は使わず、飲み物は温かいものを提供する。

「パンの日」は食事にかかる時間が短くなり、台所の負担はかなり減った。一方で、「コンビニならおにぎりがいい」「食事代二〇〇円では赤字じゃないか」「栄養的にどうか」「月二回に増やしてもいいのでは」「注文したり取りに行く奉仕者の負担もある」などの意見も出た。総じて、「パンの日」は、受け入れられ、定着してきた印象を持った。

食事当番の仕事については、おかずは「サラダを作る」を標準形としている。レタス、トマト、キュウリ等の野菜、卵、ハム等を購入し、卵をゆで、野菜を切る。奉仕者によっては煮物を炊いたり、スーパーの総菜のロッケを購入してくる者もいる。奉仕者により個性が出るので、毎週違う食卓が味わえる。おかずを準備する際、食材の制限は基本的には行わないが、アルコール依存症の回復途上の方に配慮し、料理酒やみりんは不使用としている。また高齢で歯の悪い仲間に配慮し、サイズや硬さに気を付けているという奉仕者もいる。

3. 負担について

なか伝道所では、現在、毎週の奉仕の係を各自で記入してもらう方式をとっている。食事当番に空欄があると、すでに名前を記入した教会員が気を遣って追加で記入し、特定の奉仕者に負担が偏る傾向が見られる。多くの場合、そのような教会員は他にも役割を兼任しており、負担が多すぎると感じる。

新しく加わった仲間に誘いかけをして奉仕者を増やすことや、複数名で係を担うことなどを試みているが、難しい。

書き手も何度か食事当番の奉仕を行ったが、仲間の顔を思い浮かべながら料理を作り、「おいしい」と食べてもらうのは喜びである

反面、仕事や家庭の用事が忙しく疲れがたまつた週末には（今週は食事当番か・・・きついな）と思つたことも一度や二度ではない。

別の角度から、礼拝出席をして食事をとらずに帰った経験のある教会員から、「昼食時間は慌ただしいので、体調が悪い時は遠慮する」「たまの休みには礼拝が終わつたらすぐ失礼して別の用事をすませたい」などの意見が出た。食事の準備から片付けまでの時間はあわたたくし、負担だと言つ人も複数名いた。

4. 必要(2)52

なか伝では、寿の町で暮らす仲間も礼拝に出席し、みんなで一緒に同じ昼食を食べて話をする恵みを得ている。日頃は孤食であつたり、栄養バランスが十分とはいえない食生活を送る仲間を想像する時、日曜日の昼にわいわい話をしながら手作りの食事を摂る、昼食提供のサービスはなか伝の活動の大切な柱となつていてと考える。

また遠方から礼拝に通う仲間にとって、何も食わずに家まで帰るのは体力的に厳しい。昼食が提供されたいが、なくなつたら寂しい、続けてほしいという声は強い。初めての礼拝出席者に「お昼いかがですか」と誘い、滞在時間を伸ばし、仲良くなるツールとしても使える。伝道上也効果が大きいと考える。一方、昼食は必要な人が各自で持参すればよいのでは、という声も複数名から上がった。月に何度か「食事なしの日」を作り、必要な人は各自で準備するという案だ。食事なしの日を設定するには、現在の学習会や読書会などの伝道所のスケジュールや頻度も見直し、何もない日とする必要があると考える。

5. その他の意見

「お茶会の日を作つてもいいのではないか。お腹を落ち着かせて、解散する。飲み物とお菓子だけなら負担も少ない。」

「色々な人の料理が食べられて、毎週とても楽しみ」

「作つた料理をおいしいとおかわりしてくれて、完食されると嬉しい」

「パンの日をもう一日増やして、月2回にしてもいいのでは」

「お昼がなくなつたら、つまらない、寂しいと思う。」

「当番の日は、礼拝中から後の段取りを考えて、礼拝に集中できないことがあるので反省する」

「味の心配をしている。硬さや、大きさは大丈夫か、味が苦手な人はいないか。」

「家が遠いのでお昼を出してもらつてありがたい」

「当番表の空欄を埋めてくれる人がいるのはありがたいが、全体的な仕事を減らす方向にしていきたい」

「やはり大変なので、負担を減らす方法を考えられないか」

「率直に意見を交わせるのがなか伝のいいところ」

6. まとめ

伝道所が、多くの仲間の奉仕によって成り立つ共同体であることを再認識した。一人ひとりが、できることを、できる範囲で、喜びをもって奉仕することが理想だが、現実には、一部の仲間が、過重な奉仕を余儀なくされている現実がある。

今回、率直な意見を多く得た一方で、発言しなかつた（できなかつた）人にも思いを馳

せてみたい。年齢、体力、住環境などの様々な事情で奉仕することが物理的に不可能で、サービスを受ける側となることの多い仲間の本音を聞き出せたのだろうか。高齢の方が増えている中で、自身の体力以上の無理をしたり、素直な思いを発言できないような場面はなかつたのだろうか。

書き手にとってなか伝は、「何もしてなくても、ただ、そこにいてだけで存在を歓迎される場」であり続けたいと願っている。食事の準備の間、椅子に座つて新来会者や慣れない仲間と話しかけて和やかな雰囲気を作つてくれる仲間がいる。皆で歌う讃美歌の伴奏のギターを練習している仲間がいる。そんな一人ひとりの仲間の姿が、新来会者にこの伝道所には自分の居場所がありそうだと感じてもらい、新しい仲間（＝将来の奉仕者）として迎え入れる力になるのではないか。なか伝が新しい仲間をひきつける魅力ある器となりえなければ、この昼食サービスだけでなく、伝道所が維持できなくなるだろう。

一方で、献身的な奉仕者が、心身の調子を崩したり、疲弊して傷つき、結果的に伝道所を離れてしまうことのないように、負担を減らすための知恵を出し合つていきたい。奉仕者の負担の問題は、読者の皆さんが所属するコミュニティにおいても共通の課題ではないだろうか。以前と同じやり方にこだわるのではなく、「パンの日」の取り組みのように、もっと楽になる方法を考えたり、新しい取り組みを探して試していきたい。

なか伝の宣教方針である「1. 貧しい人々への福音に共にあずかる」「2. 地域の問題に関わる」ために、私たちが今できていることは何だろうか。見直した方がいいことはなにか。これからできそうなことは何だろうか。

なか伝の規模で、毎週、昼食サービスを提供していることは大変な負担であることは間違いない。しかし、大変だから止める、なくすというのではなく、なか伝が今後どんな教会形成を目指していくのか、どんな仲間を招きたいのか、今一度、考える時期にあると感じている。（牧田）

渡辺英俊牧師の新刊！

『イエスに迫る——マニュアルと実験』

（ラキネット出版、二〇一八年）

「イエスは何を語り、何をしたのか。」

二〇一七年度に、なか伝道所が主催した「聖書公開講座」の成果が昨年一〇月に公刊されました。マニュアルをつかつて参加型のグループ学習で繰り広げられた「実験」の記録。内容は以下のとおりです。

第1章 マニュアルの使い方

第2章 イエスの基本姿勢

——2つの「短言」から

第3章 失われた者の重さをめぐつて

——3つのたとえ話から

第4章 貧しい人々への福音

——2つの「主の言葉」から

第5章 奇跡物語は何を語るか

——3つの奇跡物語から

第6章 「いっしょにメシを食う福音」

ぜひ手にとってみてください。「グループ学習にも最適です」と評判一冊です。

（YH）

使信

よ ひかり

世の光

堀江有里

イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」それで、ファリサイ派の人々が言った。「あなたは自分について証しをしている。その証しは真実ではない。」イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。」

(ヨハネによる福音書八章十二〜十四節)

「ソルフエイ」との出会い

「うたは世につれ、世はうたにつれ。」辞書を引くと「ある時代によく歌われる歌は、その時代の世情を反映しているものだ」とあります(三省堂『大辞林』)。音楽は、それを聞いていた時間や空間を強力に喚起してくれるツールのひとつです。

宗教を前面に出した音楽が苦手だったわ

たしを見事に裏切ってくれた出会い。それは「Soul of Faith」(ソルフエイ)というバンドでした。ドラムスを叩く若い友人・寺田留架くんが、横浜でライブをやると教えてくれたのは昨年のこと。信仰理解が大きく異なることをわかりつつ、かれはこれまでにも何度か東京への講演に友だちを引き連れてきてくれたり、非常勤先の講義に顔を出してくれたりしてきた懐深い青年。そして同時に「約束の虹のミニストーリー」という大事な活動をつづけています。

「弱い」信仰、「強い」信仰

キリスト教の信仰のあり方には、大きく分けて二つのアプローチがあるので、ではないでしょうか。誤解をうむかもしれませんが、仮に「強い」信仰と「弱い」信仰と名づけておきます。

ひとつには「強い」かたちで打ち出す信仰のあり方。絶対的な神の存在を明示的に力強く語る、人とのコミュニケーションにおいても「祈っています」という言葉を打ち出すようなあり方です。絶対的な正義に押し出されて、自分たちが存在することを確信しているようなスタイルです。

もうひとつには、「弱い」かたちで神の存在を全面的には明示しないあり方。逡巡し、葛藤しつつも、神を探す共同性のなかに宿る信仰です。自分の側に正義が存在すると思ひ込んでしまう瞬間を問い、「祈る」とは何か、「信仰」とは何か、「神」とは何か

えーとねえ

4月から始まる花(12歳)の中学生生活について、家族であれこれ話し合っているときに。

父「高校に入るには受験しないといけないんだよ」

母「1年生のときから勉強をがんばらないとね」

花「えー。大変そうだなあ」

友「テストなんかしないで、全部あみだくじで決めればいいのね！」

「人生あみだくじ……」。何かを悟ったらしい 幸前友 10歳

風景

いと小さき解決?

毎週の愛餐式が無くなっても礼拝後は大変慌ただしい。テーブルの上を片付け、箸や皿を並べ、おかずを運び、飲み物の用意にパン焼きなど、各自が仕事をみつけて動き回る。

長年の習慣でも出席者の構成や年齢層が変わり、「食事の準備」を見直す必要が出てきた。中でも一品のおかずを作る「当番」は高齢者や遠方からの出席者、調理をする生活習慣が少ない方にはハードルが高い。話し合いの時には「当番」をしていないという思いから発言を控えているのでは? という感じが私の中で消えない。

別の時に

「・・・レタスを洗ってちぎる位、やってくれる?」と声をかけてみると、

「その位なら」

「私が食事当番の時に一緒にやってくれない?」

「ん、いいよ」

「でも私、貴方を子分にしようなんて気はないからね」

「ハハハ」

次の当番が楽しみ。

(武井昭代)

か、それぞれの〈あたりまえ〉の前に問いかけをしつつ、対話を模索するあり方です。

わたしは、〈弱い〉信仰といま名づけたあり方のなかで、キリスト教と出会い、歩んできました。「正義」なるものを押し出さず、問いをたずさえながら歩もうとするあり方です。地域運動と結びついたキリスト教が、出発点だったからかもしれません。ソルフェイはクリスチャン・ロックとみずからのジャンルを表現します。わたしのクリスチャン・ロックのイメージは力強く神を明示するスタイル。しかし、ソルフェイは、それを見事に裏切ってくれました。

■「Light for the World」

ソルフェイの中心人物は、ボーカリストのオオハラケンイチさんという町田にある純福音系教会のメンバー。かれが落ち込んでいるときにつくったのが「Light for the World」という楽曲です。「世の光」をモチーフにしたこの楽曲は圧倒的に楽観主義です。暗闇のなかを歩みつつける。周囲が何も見えなくなる。この世でひとりぼっち。取り残されていく感覚。オオハラさんはそんな暗闇のなか、ひとすじの光を見出し、この曲をつくりました。葛藤しつつ、少し浮かびあがってきたときに生まれてきた曲だそうです。その曲を仲間たちとともに

まど

▼教会にはさまざまな〈こまりごと〉が集まります。役所への同行支援などにたずさわりながらそんなことを思います。家にいられなくなった人たち、セイフティネットがない人たち、「帰る」場所のない人たち……。追いつめられると周囲がみえなくなってしまうのですが、ふと「昔話」が飛び出すことがあります。▼「昔話」にはふるさとのモチーフが多くあります。未知のまちで孤独を感じ、誰かを攻撃してしまう感覚はわたしにもよくわかるような気がします。語られるふるさは、そんなとき、攻撃性をそっと緩和してくれます。でも、そこで同化してはならないと思うこともしばしば。遠く山並みや広い空、天

候によつて変化する水かさを蓄えた川。何よりもそんな風景のなかに存在する大事な友人たち。ふるさととは、いのちがつながってお互いに支え合う場所。わたしにはふるさどがある。リアルなかたちで。たとえば、原発事故で、土地取用で、関係性の断絶で「帰る」場から引き離された人たちもいる。だからこそ、同化してはならない、と思うのです。▼〈こまりごと〉をたずさえた人たちと出会い、抱えきれなくなったとき、いまわたしの支えてくれるのはふるさとです。生活困窮者の支援業務をしていた仲間たちをはじめ、人のネットワークの〈有り難さ〉。いのちの連なり。これからもたくさんのふるさとをつくっていききたいものです。

(堀江有里)

演奏する。共同性をもって提示する。暗い曲なはずなのにとても楽しそうに演奏する人びとの姿。まさにバンドの醍醐味です。その楽曲をリズムをとりながら客席で楽しむ。そこにあるのは相互行為です。その空間や時間の共有と相互行為のなかで神を求める、あるいは探す姿がありました。

■イエスの姿をさがしつつけて

実際に「世の光」を聖書で見るとそこには力強いイエスの姿が描かれているのかもしれない。自分勝手に神を引用して提示されるのはイエスの証しが「真実である」ということ。理由は「父によつて遣わされた」存在であるとの確証です。ヨハネ福音書が描くイエスの姿は力強い。しかし、この〈強さ〉の背後にある〈弱さ〉にこそ、わたしは注目したいのです。わたしたちは、イエスを通してどのような神と向き合おうとするのか。考えつつ歩いていきたいと思えます。

編集後記

新元号に対応するシステム改変のため、私の勤めるシステム会社では、同僚のプログラマー達が、多大な時間と労苦を強いられる。他者批判はたやすいが、振り返って私自身は、何を捨て、何を残すかの選択を正しく行っているだろうかと思省することばかりである。

(牧田)